

平成28年度 森林総合研究所 北海道地域研究成果発表会報告

今年度の研究成果発表会が下記の日程及び内容で開催されました。発表会当日には多数の方々にお越しいただき誠にありがとうございました。

記

日時：平成29年2月8日（水）13時30分～16時10分

会場：男女共同参画センター 3階 ホール

（札幌市中央区北3条西8丁目 エルプラザ内）

参加者数：138名

題名：「北の森林を活かす（きたのもりをいかす）」

発表1. 「地域森林資源の有効利用に向けて」

発表者：嶋瀬 拓也（チーム長 林産物市場分析担当）

【要旨】

北海道の森林資源の有効活用に向けて、森林・林業・木材産業の現状を整理し、木材生産・流通・加工のあり方を考察しました。

まず、針葉樹については、人工林資源と製材・合板工場の地理的分布のずれ、森林資源の高齢級化・大径化と小径材に偏った需要、道内需要を満たさないまま道外に出荷される製品といった3つのミスマッチがあることを指摘し、原木輸送の効率化や、資源と需要にマッチした工場の建設など、ミスマッチを解消するための提言を行いました。

また、広葉樹については、天然林資源の劣化や伐採縮小により、かつてのような大径・優良材の供給が困難になるなか、小径材や低利用樹種の利用拡大に向けた需給双方の取り組みが活発化しており、その具体例を紹介しました。ウイスキー樽の需要増など最近の動きも取り上げ、広葉樹需要に対応した取り組みの必要性を示しました。

最後に、これらのことをバランスよく踏まえた「北海道森林・林業・木材産業のグランドデザイン」の必要性を提起しました。

発表2. 「森林の間伐と水源涵養機能」

発表者：延廣 竜彦（寒地環境保全研究グループ主任研究員）

【要旨】

森林は間伐を行うことにより、林内は明るくなり、下草が繁茂し、木の生育も良くなることが知られています。また、間伐によって水源涵養機能も高

くなると言われています。水源涵養機能とは一時的に降雨を森林土壌中に蓄えることにより洪水・濁水を緩和する機能や水資源を貯留する機能を指しますが、間伐することによってこの水源涵養機能がどれくらい変化するか、これまで具体的な数字と共に語られることは多くありませんでした。

そこで、私たちは実際に茨城県のヒノキ人工林で間伐を行い、流域スケールで間伐前後の水源涵養機能の変化について調べました。その結果、間伐がもたらす樹冠層の葉量の減少が蒸発散量を低下させ、それにより河川への流出量が多くなることを明らかにしました。

発表3. 「林業遺産と地域づくり」

発表者：八巻 一成（北方林管理研究グループ長）

【要 旨】

近年、世界遺産をはじめとするさまざまな遺産がブームとなっています。日本森林学会では、林業遺産を選定する取り組みを2013年度より始めました。北海道からは「東京大学北海道演習林」が、他に例を見ない長年にわたる大規模な天然林施業の実績が評価され、林業遺産に選ばれています。このように、北海道における林業発展の歴史をとどめる林業遺産を後世に残し、地域づくりや森林教育に利活用していくことは、これからますます重要になるでしょう。

そこで、私たちは北海道の林業遺産の候補地を、北海道文化資源データベースや文献調査、聞き取り調査によってとりまとめました。その中にはパイロットフォレストなどの林業地や各地の森林鉄道の遺構が含まれています。特に森林鉄道は注目度が高く、現在、丸瀬布で観光用に利用されている森林鉄道は、林業遺産を地域おこしに繋げる良い事例と考えられます。

一方、林業遺産の多くは森の中に埋もれつつあります。また、当時を知る人も次第に少なくなり、人々の記憶からも消え去ろうとしています。消えかけている林業遺産に改めて注目し、これらを保存するとともに、地域おこしに活用する取り組みが求められます。



開会挨拶（松本支所長）



会 場 風 景



ポスター展示



発表 1 (嶋瀬)



発表 2 (延廣)



発表 3 (八巻)